

044 視点を変えて腹動（腹の動悸）に注目し胃の不快感が著効した例（福岡支部 森山）

女性 29歳 OL

主訴 胃のむかつきによる食欲不振

現症 半月ほど前から間欠的に胃の不快感、特にむかつきがあり、それに伴い徐々に食欲がなくなりだした。以前から鍼治療に興味があり来院。

随伴症 以前からある便秘の悪化、下肢のむくみ、易疲労、不眠。

所見 脉状「やや緊やや数」
腹証「右中注」硬結あり圧痛(+)、「小腹不仁」冷たく感じる。
局所「右天牖」(+),「右肩井」(+),「両陰陵泉」(+),「前脛骨筋」硬い。

処置 「右天牖」に対して扁桃処置、「易疲労」に副腎処置（復溜・兪府・尺沢）復溜のみ留鍼をする。「右中注」に瘀血処置（中封）、「右肩井」と「陰陵泉」で骨盤鬱血処置（両陰陵泉に留鍼雀啄）、「前脛骨筋」に胃の気処置。

ここまでの処置後に検脉すると、緊脉は緩み、右中注の圧痛消失、胃の不快感も殆どなく、お腹が軽くなった感じがすると。しかし、小腹不仁はあり、冷えも感じる。これに対して「次髎」に灸頭鍼を追加。術後、お腹に暖かさを感じ、少しお腹がすいた感じがするという。

経過 2回目（8日目）、3回目（22日目）と所見は同じで、同様の治療を行う。毎回術後の3日間程は食欲があり、胃の不快感もないが、それ以後徐々に胃の不快感がもたげてきて、食欲も低下してくるという。

4回目（29日目）治療効果が一進一退のため、もう一度丹念に所見を取ってみると、今まで診落としていた“腹動”を感じる。患者との会話の中で、「会社での人間関係がうまくいかずとても悩んでいる」というのを思い出す。それで自律神経調整処置（委中・飛陽・崑崙・第3趾裏横紋）を追加する。術後、自覚的にも体が軽くなり、とても眠たくなったという。局所の反応（火穴）も消失、脉は「ほぼ平脉」となる。

5回目（36日目）前回の治療から胃の不快感も殆どなく、食欲も出てきた。眠りもよくなり、翌日は体が軽いという。再発予防の為現在も加療中である。

考察 今症例は患者の社会的ストレスによって、交感神経の緊張状態が続き、胃の不快感を引き起こしたと思われる。また、消化機能を活発にさせているのは副交感神経なので、ストレスによって交感神経優位になると、消化機能が悪化し、食欲低下、便秘が起ったと思われる。

主訴の原因を初診時の所見から3回目の治療まで、胃の気の不足、小腹不仁と思いついてしまいがち、毎回の診立てがおろそかになり、処置が不完全だったから効果が持続しなかったと思われる。4回目のとき、先入観なしに所見をもう一度とり直した結果、腹動に気付き、交感神経の緊張が原因だと思った。それで、自律神経処置を加えるとそれ以降、治療効果が持続するようになった。

今思うと初診時の所見にも「脉状」「圧痛」の多いことから自律神経処置は外せないことが分かる。勝手な固定概念により、特定の所見に囚われ全体が見えていなかった。所見に対し1つ1つ処置していくことも大事であるが、その前に患者という人間、

患者の社会環境なども含め、広い視野で診立てなければならぬと感じた。東洋医学の本質である“病気を治すのではなく人間を治す”ということの大切さを痛感した症例である。